# 豊浦谷古墳群第1次
# 発掘調査報告

2001年

東大阪市教育委員会

# 例　言

1. 本書は、東大阪市東豊浦町966番地においてダイミツ建設株式会社が計画した分譲住宅建設工事に伴う、豊浦谷古墳群第１次発掘調査の調査報告書である。
2. 調査は東大阪市教育委員会が、ダイミツ建設株式会社の依頼を受けて同社との間に経費負担に関する覚書を締結して実施した。
3. 主要な現地調査は、工事の関係で遺物包含層が破壊される駐車場部分2個所を平成13年4月13日から4月19日（1－1次）と同年4月24日から5月1日（1－2次）まで2回に分けて福永信雄を担当として実施したが調査地が南北に接するため一括して報告する。
4. 本報告書の作成は、福永が担当した。
5. 調査実施にあたりダイミツ建設株式会社の方々に多大な御協力を賜った。また現地作業および整理作業には下記の方々の協力を得た。記して謝意を表する。
   千喜良淳・島田拓・横山佐夜子

# 本文目次


Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．調査概要 …… 2
　１．層序 …… 2
　２．遺構 …… 3
　３．出土遺物 …… 5
Ⅲ．まとめ …… 8


# 挿図目次


第１図　調査地位置図 …… 1
第２図　土層断面図 …… 2
第３図　1-1･2次調査検出遺構実測図 …… 4
第４図　出土遺物実測図 …… 6

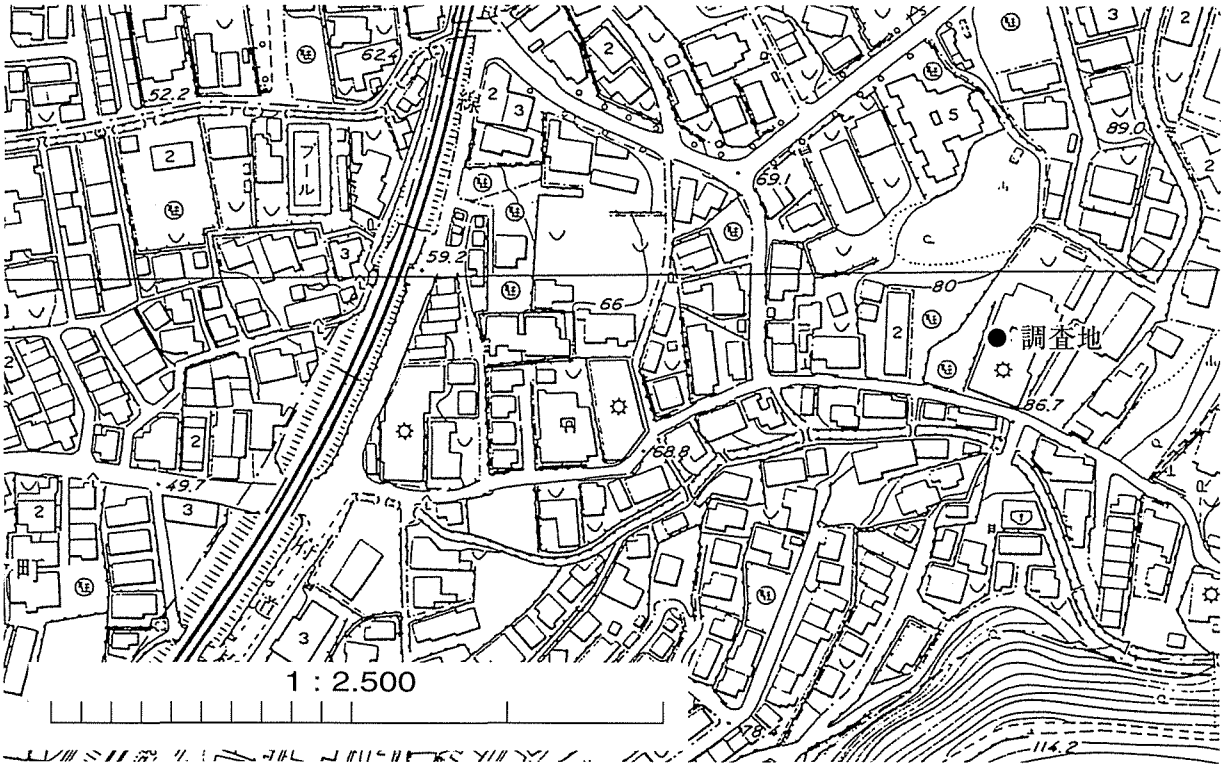

# 写真・図版目次


写真１　出土遺物 …… 鉄釘・土人形 …… 8
図版１　遺構 …… 上. 作業風景（南より）
中. 調査地全景（北より）
下. 第1-1次調査地東壁（南西より）
図版２　遺構 …… 上. 第1-1次調査検出遺構全景（西より）
中. 検出遺構全景（南より）
下. ＳＰ０６検出状況（西より）
図版３　出土遺物 …… 上. 須恵器・国産陶器・中国製磁器（白磁）
下. 土師器・瓦器・東播系須恵器
図版４　出土遺物 …… 上. 土師器皿・甕・鉢
下. 瓦器椀

# Ⅰ　はじめに

豊浦谷古墳群は生駒山の西麓、東大阪市東豊浦町に所在する遺跡である。古墳群は現在4基の後期古墳で構成するとされている。現存するのは2基で、暗越え奈良街道と並行して西流する暗渠（豊浦谷）に面した北側の尾根の先端部に横穴式石室をもつ半壊状態の古墳が認められる。他の2基は墳形・主体部ともに不明である。今まで群を構成する古墳の調査例が無く実態は不明であるが、古墳時代後期に属す小規模な群集墳と考えられる。本古墳群は、生駒山西麓西下する小河川により刻された豊浦谷と額田谷の間（南北間約500m）の標高100m前後付近に位置する。両河川に画された範囲の中には、本古墳群から北約100m離れて12基の横穴式石室（一部小竪穴式石室を含む）を主体とする古墳群と想定されるみかん山古墳群が所在する。位置や地形から見て本古墳群は、この古墳群の支群と見ることもできる。また、豊浦谷を隔てた南側には14基の横穴式石室を主体（一部小竪穴式石室を含む）とすると考えられている出雲井古墳群（本古墳群の南約100m）が存在する。いずれも、古墳時代後期に属す群集墳である。

これらの古墳群は、本古墳群の南約600mに位置する山畑古墳群（約150基以上で構成）と異なり小規模である。山畑古墳群は、規模から山麓のみならず平野部に居住した複数集団も含む有力家族による共同墓地と考えられるが、本古墳群を含む10基戦後の小規模な古墳群は各谷を構成する小河川の流域に位置する山麓の扇状地上に居を構えていた在地の有力家族の墓と考えられる。今回の調査地は、調査前は東から西に下がる傾斜地を棚田に造成した後に近代以降に建物が建てられた場所であった。従前は古墳群として周知されていたが、調査地に分譲住宅の開発計画が提出されたため東大阪市教育委員会が、建設工事に先だち実施した確認調査により中世の遺物包含層の存在が認められた。この結果を受け、東大阪市教育委員会は開発者のダイミツ建設株式会社と発掘調査に関する覚書を締結した上で、工事に伴い破壊される駐車場部分（32.4m²）を対象に当該地に存在する遺構・遺物包含層を明らかにすることを目的の一つとして事前調査を実施した。




第1図　調査地位置図

# Ⅱ　調査概要

調査は、現代の盛土約70cmを機械を用いて掘削した後、旧耕土以下を人力で掘削した。以下、調査により判明した概要を層序・遺構・出土遺物の順に記す。

**1. 層序**

第１層　盛土。厚さ70cm。現代に施行されている。

第２層　5Y4/2　灰オリーブ色砂質土（旧耕土）。厚さ10～15cm。調査区全体に認められた耕作土である。上部は盛土時に一部撹乱され凹凸がみられる。層中から土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器・瓦・鉄釘などが出土した。出土遺物から近世から近代の耕土と考えられる。

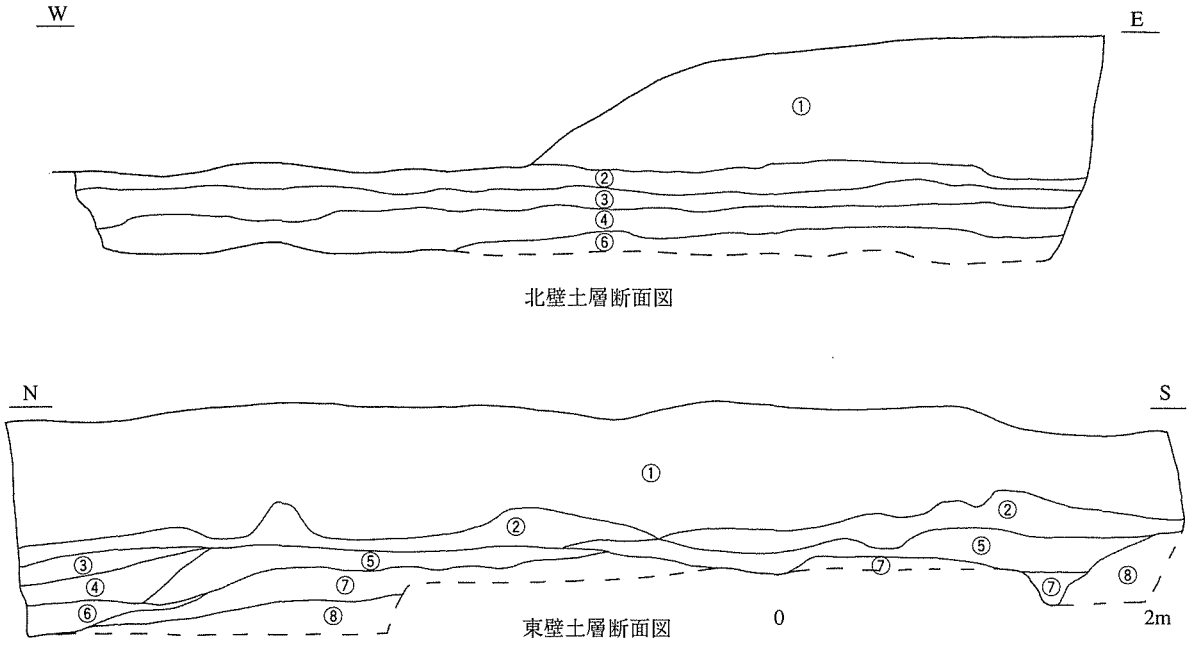
第３層　5Y3/2　オリーブ黒色砂質粘土（包含層1）。厚さ10～20cm。調査区の北側のみに見られる。やや北西に下がり堆積している。層中から土師器・須恵器・瓦器・中国製磁器（白磁）・国産陶磁器・瓦・鉄釘・焼土塊などが出土した。出土遺物から近世の包含層と考えられる。

第４層　10YR3/2　黒褐色砂混じり粘質土（包含層2）。こぶし大の礫を含む。厚さ10～20cm。第3層と同様に北西に下がり堆積する。層中から土師器・須恵器・瓦器・中国製磁器（青磁）・焼土塊などが出土した。遺物は第3層に比して少ない。出土遺物から中世の包含層と考えられる。

第５層　10YR3/3　暗褐色砂混じり粘質土（包含層２）。こぶし大から小児頭大の礫を含む。厚さ10～20cm。調査区のほぼ全域に認められる。第4層と同様の遺物が出土した。

第６層　2.5Y4/2　暗黄灰色粘質土　厚さ20cm。北側に向かって下がる落込み1の堆積土。調査区の北側のみに認められる。上部では土師器・須恵器・瓦器が含まれ、下部では弥生土器・須恵器・瓦器が出土した。全体的に遺物量は少ないが、上部に比して下部のほうがやや多い。出土遺物には古代に属するものも見られるが、大半が中世に属しこの時期に形成されたと考えられる。

第７層　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質粘土。いわゆる地山層、上面で遺構を検出した。調査区の北側に向かい下ることから、調査地の旧地形は北の小さな谷筋に向かいゆるやかに傾斜する地であると思われる。以下、第8層のオリーブ褐色（2.5Y4/3）砂混じり粘質土と地山層が続く。




第2図　土層断面図

## 2. 遺構

遺構は、第7層上面で検出した。検出した遺構は土壙（1基）・ピット（9個）・落込み（2個所）である。ピットは、掘立柱建物の柱穴と考えられるが建物の規模や平面形は復元はできなかった。検出した遺構の概要を以下に記す。

**土　壙**

ＳＫ０１　調査区南端で検出した。平面形が楕円形を呈し長軸52cm、短軸35cm、深さ5.2cmの規模をもつ。堆積土は暗褐色（10ＹＲ3/3）砂混じり粘質土で遺物は出土していない。

**ピット**

ＳＰ０１　調査区東端で検出した。平面形が楕円形を呈し長軸20cm、短軸18cm、深さ10cmの規模をもつ。堆積土は灰黄褐色（10ＹＲ4/2）砂混じり粘質土で土師器の細片が出土した。

ＳＰ０２　ＳＰ01から北西方向に1.7m離れた調査区中央やや北側で検出した。平面形が楕円形を呈し長軸20cm、短軸17cm、深さ9cmの規模をもつ。堆積土はにぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）砂混じり粘質土で遺物は出土していない。

ＳＰ０３　ＳＰ02から北北西方向に1.3m離れた調査区北側の落込み１の底面で検出した。平面形がほぼ円形を呈し長軸20cm、短軸19cm、深さ9cmの規模をもつ。堆積土はにぶい黄褐色（10ＹＲ4/3）粘質土で瓦器の細片が出土した。

ＳＰ０４　ＳＰ02から南西方向に1.4m離れた調査区のほぼ中央、落込み１の肩部で検出した。平面形が楕円形を呈し長軸24cm、短軸22cm、深さ10cmの規模をもつ。堆積土は、第6層と類似した暗黄灰色（2.5Ｙ4/2）粘質土で遺物は出土していない。

ＳＰ０５　ＳＰ02から西方向に3.2m離れた調査区の南西部で検出した。平面形が楕円形を呈し長軸22cm、短軸20cm、深さ9cmの規模をもつ。堆積土は、第5層と類似した暗褐色（10ＹＲ3/3）砂混じり粘質土で遺物は出土していない。

ＳＰ０６　ＳＰ02から南方向に2.6m離れた調査区の東端で検出した。平面形が楕円形を呈し長軸18cm、短軸15cm、深さ3cmの規模をもつ。堆積土は、第5層と同じ暗褐色（10ＹＲ3/3）砂混じり粘質土で土師器・瓦器の細片が出土した。

ＳＰ０７　ＳＰ02から西方向に1m離れた調査区の西側で検出した。平面形が楕円形を呈す長軸20cm、短軸19cm、深さ8.5cmの規模をもつ。堆積土は、第5層と類似した暗褐色（10ＹＲ3/3）砂混じり粘質土で土師器の細片が出土した。

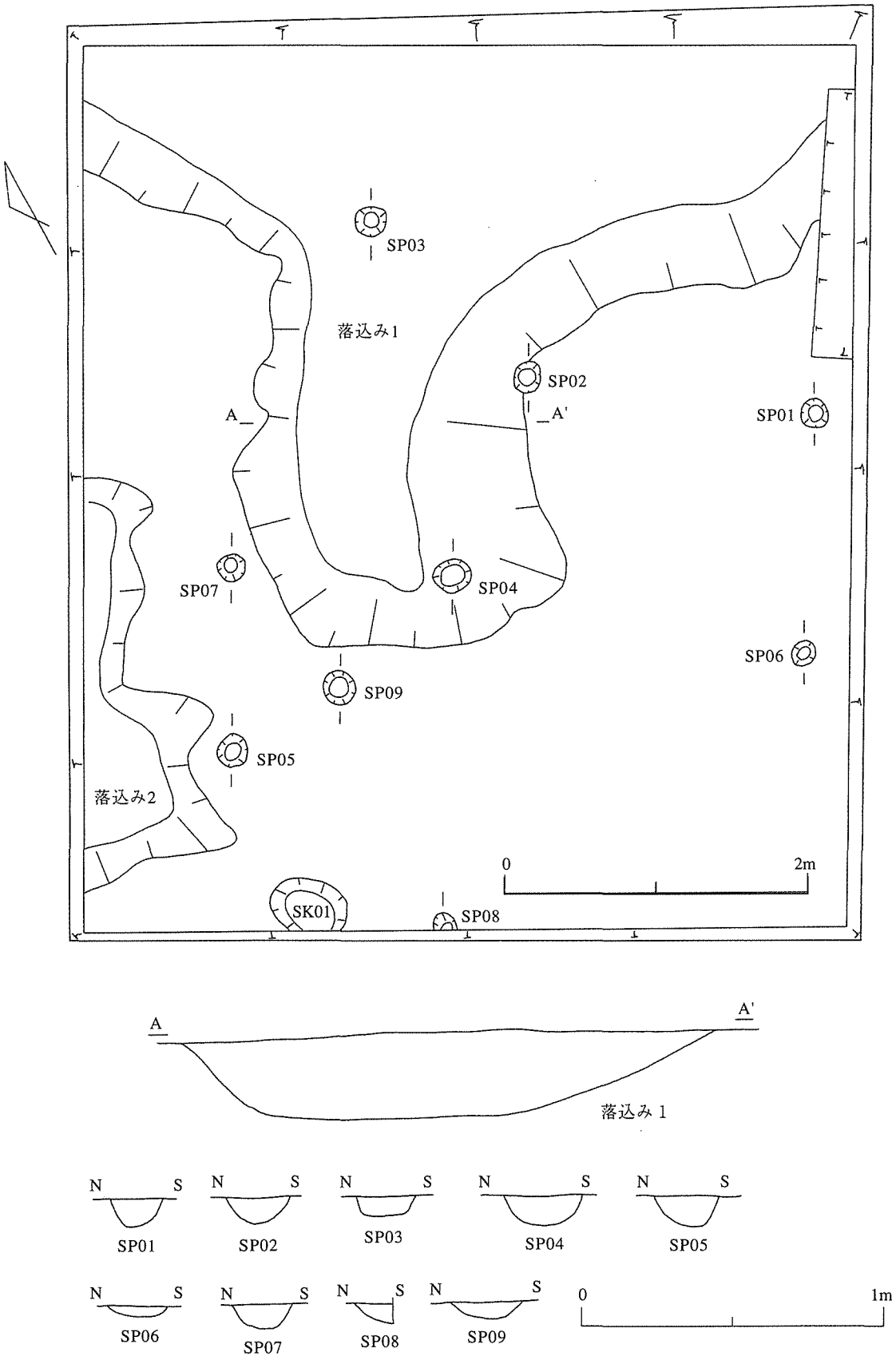
ＳＰ０８　ＳＰ02から南西方向に2.6m離れた調査区の南端で一画（約半分）を検出した。深さ8cmの規模をもつ。堆積土は灰色（5Ｙ4/1）砂混じり粘質土で遺物は出土していない。

ＳＰ０９　ＳＰ02から西方向に1m離れた調査区中央部よりやや南西側で検出した。平面形が楕円形を呈す長軸24cm、短軸20cm、深さ5cmの規模をもつ。堆積土は第5層の暗褐色（10ＹＲ3/3）砂混じり粘質土に似るが、わずかに径5cm前後の礫が少量含まれる。遺物は出土していない。

**落込み**

落込み１　調査区の中央付近から北側に向かい広がりながら延びる平面形がＴ字状を呈する浅い窪地状の落込みである。調査区北端部での深さは20cmである。堆積土および出土遺物は、層序で述べた通りである。堆積土および形状から見て自然流路の可能性が高い。

落込み２　調査区の南西部で検出した西側に向かい延びる浅い窪地状の落込みである。平面形は、大半が調査区外に広がるため不明である。堆積土は落込み１に類似するが径2cm前後の礫が少量含まれる。遺物は土師器・瓦器・須恵器が出土した。落込み1と同じく自然流路の可能性が高い。




第3図　1-1･2次調査検出遺構実測図

### 3. 出土遺物

今回の調査でコンテナ2個分の遺物が出土したが大半が小破片である。遺構出土品は自然流路と考えられる落込み出土遺物を除き量も少なく図示できるものが無い。以下説明する。

**包含層１出土土器**（第４図1～31）

土師器皿・羽釜、瓦器、中国製磁器（白磁）、国産陶磁器などが出土した。遺物の所属時期は中世から近世のものが見られるが、中世の遺物を中心に説明する。

**土師器**

皿　　口径の違いにより小皿、中皿、大皿に区別される。

**小皿**　口縁部の形態によって７種類に分類が可能である。

ａ類（1～3）口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部は丸くおさめる。１は口径8.2cm。２は口径8.6cm。３は口径9.0cm。色調は三者とも、にぶい黄橙色を呈する。

ｂ類（4）口縁部は強くヨコナデが施され、体部との境がはっきりしている。４は口径7.2cm。にぶい黄橙色を呈する。

ｃ類（5､6）やや上げ底気味の体部から口縁部がゆるやかに立ち上がる。５は口径7.8cm。６は口径8.4cm。いずれもにぶい黄橙色を呈する。

ｄ類（7､8）口縁部はヨコナデより成形され、体部との境に明瞭な段を作り出す。７は口径7.4cm。浅黄橙色。８は口径8.0cm。にぶい黄橙色を呈する。

ｅ類（9）ｄ類よりも一層強いヨコナデが施され、口縁部は外反して立ち上がる。９は口径8.0cm。にぶい黄橙色を呈する。

ｆ類（10）口縁部は外反気味に伸び、端部は尖る。口径7.4cm。にぶい黄橙色 を呈する。

ｇ類（11）口縁部は斜めに伸び、端部は尖る。口径7.6cm。にぶい黄橙色を呈する。

14世紀代に属すｆ類を除き、いずれも13世紀代に属すと考えられる。

**中皿**

ａ類（12）口縁部は外湾気味に立ち上がり、端部を内側に摘みあげる。口径11.0cm。淡黄色を呈する。14世紀代に属す。

**大皿**

ａ類（13）口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。口径は15.0cm。明黄褐色を呈する。13世紀代に属す。

ｂ類（14）口縁部は緩やかに上方に伸び、端部は丸くおさめる。口縁は二段階にヨコナデを施す。口径12.8cm。にぶい黄橙色を呈する。12世紀代に属す。

羽釜（31）口縁部下に幅の広い鍔をめぐらし、端部を外側に折り曲げる。口径39.0cm。橙色を呈する。13世紀中葉に属す。

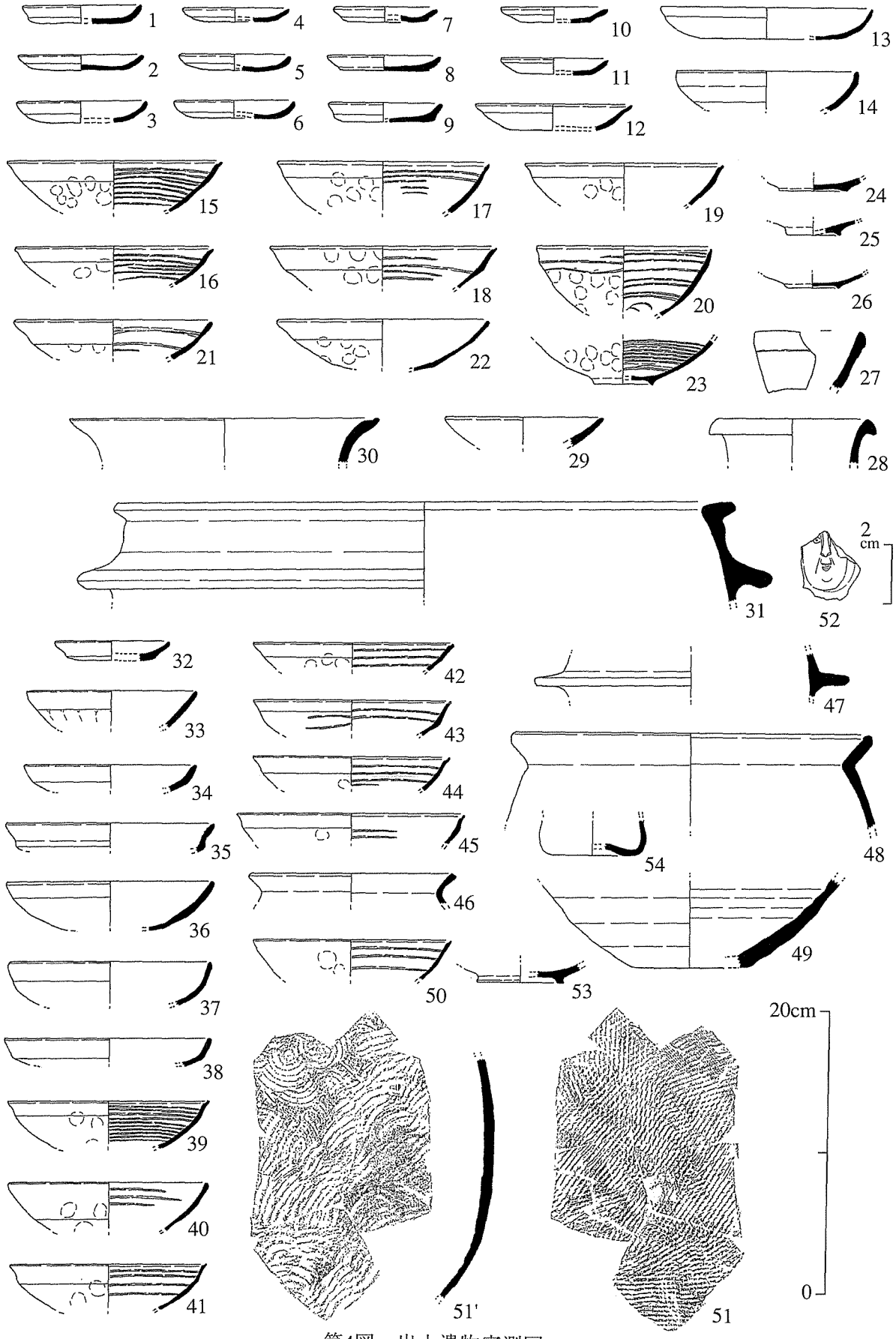
**瓦器**（15～26）

椀　大和型（15～20）と和泉型（21、22）の椀が見られる。

大和型は口縁部直下に沈線を巡らし、外面にはヨコナデ及びユビオサエを施する。内面には暗紋が巡ることが多い。口径は14～15cmを測るものが多く、色調は全て暗灰色を呈する。20のみ口径12.4cm。和泉型は口縁端部を丸くおさめる以外は、大和型に類似する。高台部は僅かに粘土紐を貼りつけたものが多い。大半が13世紀中葉に位置付けられ、（20）のみ14世紀前葉に属す。

**中国製磁器**（27､28）・**国産陶器**（29､30）

白磁（27）は碗の口縁部である。北九州ではこの種の碗は11世紀代に出現し、12世紀までみられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
2
cm
52
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
53
54
20cm
0
51'
51

第4図　出土遺物実測図

しかし、畿内では13世紀中葉～14世紀末の遺物と供伴した例もありある程度伝世された可能性も考えられる。(28) は四耳壺の口縁部と考えられるもので、13世紀代に属す。
瀬戸美濃焼 (29) 浅い碗状を呈すると思われる。形態から16世紀代に属す混入であろう。
常滑焼 (30) 瓶の口縁部である。11後半～12世紀前半に属す。内面には灰釉が掛かる。

**包含層 2 出土土器** (第 4 図32～49)

包含層 2 から中世に属す土師器皿、土師器鍋、土師器羽釜、瓦器、東播系須恵器などが出土した。

**土師器** (第 4 図32～38)

小皿 (32) 口縁部はヨコナデより成形され、体部との境に明瞭な段を作り出す。d 類に属す。口径8.0cm。にぶい橙色を呈する。13世紀代に属す。
中皿 (33) 口縁部はななめ上方に真っすぐ立ち上がり、外面にはユビオサエの痕跡がある。口径12.0cm。明赤褐色を呈する。12世紀代に属す。
大皿 (34～38) 36、37は両者とも口縁部は緩やかに上方に伸び、端部は丸くおさめる。b 類に属す。36は口径14.2cm。37は口径14.0cm。いずれも橙色を呈する。12世紀代に属す。
c 類 (34、35、38) 口縁部は体部から屈曲して立ち上がる。34は口径12.0cm。35は口径14.6cm。38は口径14.4cm。前二者は橙色。後者は浅黄橙色を呈する。13世紀代に属す。
鍋 (46、48) 両者とも「く」の字に折れ曲がる口縁部をもつ。46は口径14.0cm。明赤褐色を呈する。48は口径24.6cmを測る大型である。鍔が欠損しているため断定はできないが、大きさから考えて菅原氏分類の大和Ｂ2式の可能性がたかい。にぶい黄橙色を呈す。
羽釜 (47) 鍔の部分のみ残存する。外面には一部にススが付着する。黄橙色を呈する。

**瓦器椀** (第 4 図39～45)

和泉型の (40) をのぞくと全て大和型である。内面に暗紋を施し、外面にユビオサエを行なう。口径はいずれも14cm前後を測る。すべて13世紀代に属す。

**東播系須恵器** (第 4 図49)

捏鉢 (49) がある。体部下半部のみ残存している。内面には一部に使用痕が看取される。13世紀代に属す。

**落込み 1 出土土器** (第4図50、51)

瓦器と古墳時代の須恵器などが出土した。
瓦器 (50) は大和型の椀である。口径は14.0cm。灰色を呈する。13世紀代に属す。
須恵器 (51) 大甕の体部の一部である。灰白色を呈する。タタキメの形態などから見て 6 世紀後半に属すと考える。

**その他の遺物**

**鉄釘** (写真1-52、53)

52は旧耕作土から出土した。長さ6cmが残存しており、幅7mmを測る。釘の断面は隅丸長方形を呈する。
53は包含層 1 から出土した。長さ5.9cmが残存しており、一番厚い箇所で幅1.0cmを測る。断面は正方形を呈しており先端部は欠損している。断面形が方形を呈することから近世以前に属すことは確実であるが中世までさかのぼるかは判断できない。

**土人形** (第4図52)

第2層 (旧耕土) から出土した。仏像を象った土人形の残欠かと考えられる。出土層や形態からみて近世に属す。

# Ⅲ　まとめ

今回の調査は、本古墳群で初めての本格的な発掘調査であった。調査の結果、古墳群に関係する遺構は検出できず確認調査で想定されていた中世の遺物包含層と遺構を確認し、この地域の歴史を考えるうえに重要ないくつかの事実を明らかにすることができた。以下、今回の調査で判明した事柄を箇条書きにして記す。

1．今回の調査地は、調査区の北端が前方の小さな谷筋に向かいゆるやかに傾斜する地であることが明らかになり、すぐ南側には豊浦谷が存在することから、本来の地形は生駒山地から西に向かい派生する小規模な尾根の背に当たる場所であることが判明した。

2．豊浦谷古墳群を構成する古墳は、調査地には造営されていないが少量ながら古墳時代後期の須恵器などが出土したことから、調査地付近で古墳を造営する際に何らかの行為（例えば祭祀）が行われたことも想定される。

3．掘立柱建物を構成する柱穴を検出したが、建物の規模や平面形を明らかにできなかった。柱穴の規模などから見て小規模な建物で、鎌倉時代後期（13世紀代）に建てられていたことが判明した。出土遺物から、12世紀代から14世紀前半まで調査地ないし近隣地に継続して人が居住していたことは間違いない。以降18世紀代までの遺物が出土せずこの間は、居住地でなかったと考えられる。平安時代中～後期に属す高台付の土師器椀の破片も出土している。この時代から周辺に建物が存在した可能性が高い。

4．今回各層から出土した遺物は、13世紀代を中心としたものである。瓦器椀は和泉・大和型の両者が見られるが、全体の中で大和型の占める割合は８割程度と多い。これは山麓近隣の西ノ辻遺跡などと同様である。平野部や南河内では和泉型がほとんどを占めることから、この地域における中世土器の特色が今回もみられたと言える。この背景の一つには、山を越えれば大和という地理的条件が反映しているのであろう。また、一般集落に比して出土遺物に占める中国製磁器（白磁）の比率が高い。白磁壷も出土例は少なく、今回検出した建物の居住者の性格を反映していると思われる。

上記の調査結果から、今回の成果を総括しておきたい。標高約100m前後の痩せ尾根の背に当たる調査地は、通常の居住地であれば暗越奈良街道に隣接する地であるとはいへ立地条件が悪い。単に居住するだけであれば、麓に集落を営めば良い。あえて当時、居住地として適さない調査地付近に平安時代後期から鎌倉時代全般にわたり住み続けた理由は、平安時代後期から爆発的に広がった浄土教との関連で説明できるのではないかと考える。平安時代後期から鎌倉時代にかけて生駒山西麓に営まれた浄土教に基づく山岳寺院は、往生院や客坊廃寺のような里に近い標高100m前後の山麓と神感寺のように生駒山地の稜線付近に営まれたもの2者がある。今回の調査地は往生院などと同様の立地条件である。検出した建物の規模は、通常であれば白磁の壷などが持つ階層の住居とは考えられない。近隣に大規模な建物を建てることのできる平坦地も認められない。

これらのことから、浄土教を信奉する聖達の住む建物であった可能性が高い。出土遺物から見て周辺にも同様の小規模な建物が複数存在したものと考えられる。

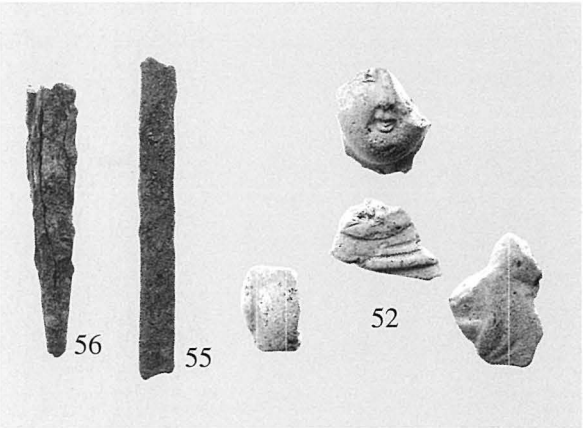


写真1　出土遺物　鉄釘・土人形

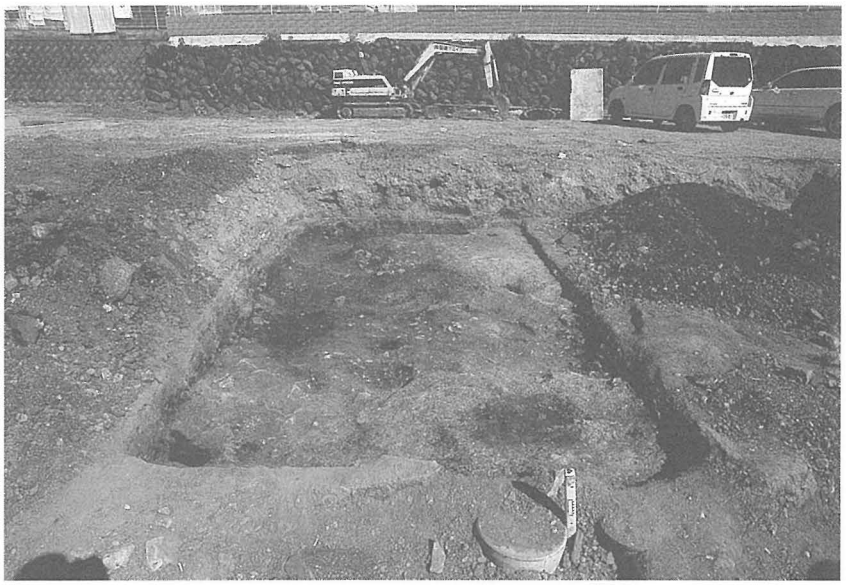
図版1　遺構

作業風景（南より）

調査地全景（北より）

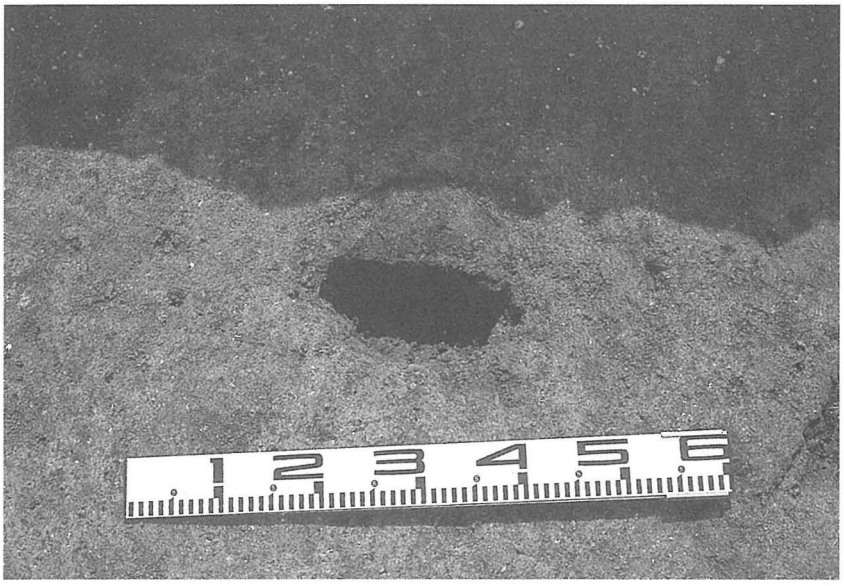
第1-1次調査地東壁（南西より）

図版2　遺構

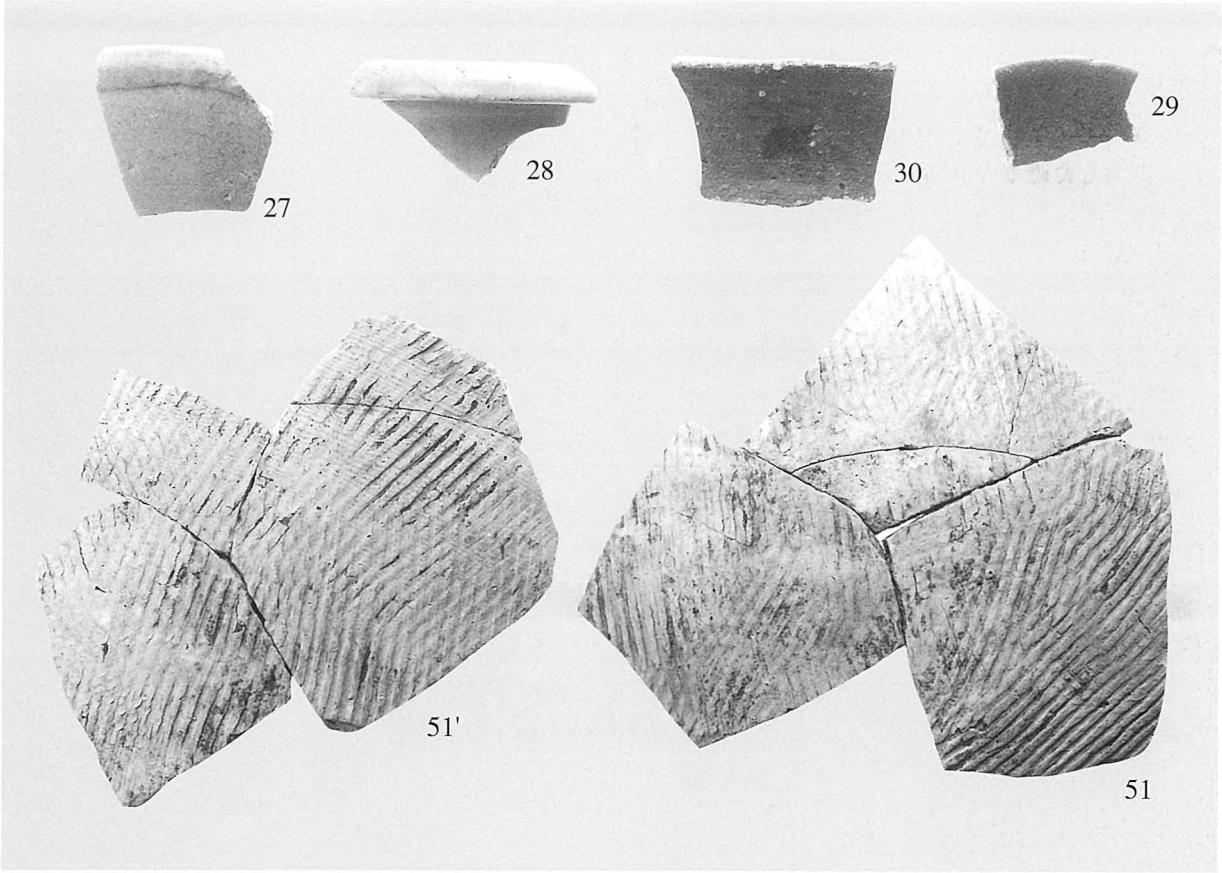


第1-1次調査検出遺構全景
（西より）

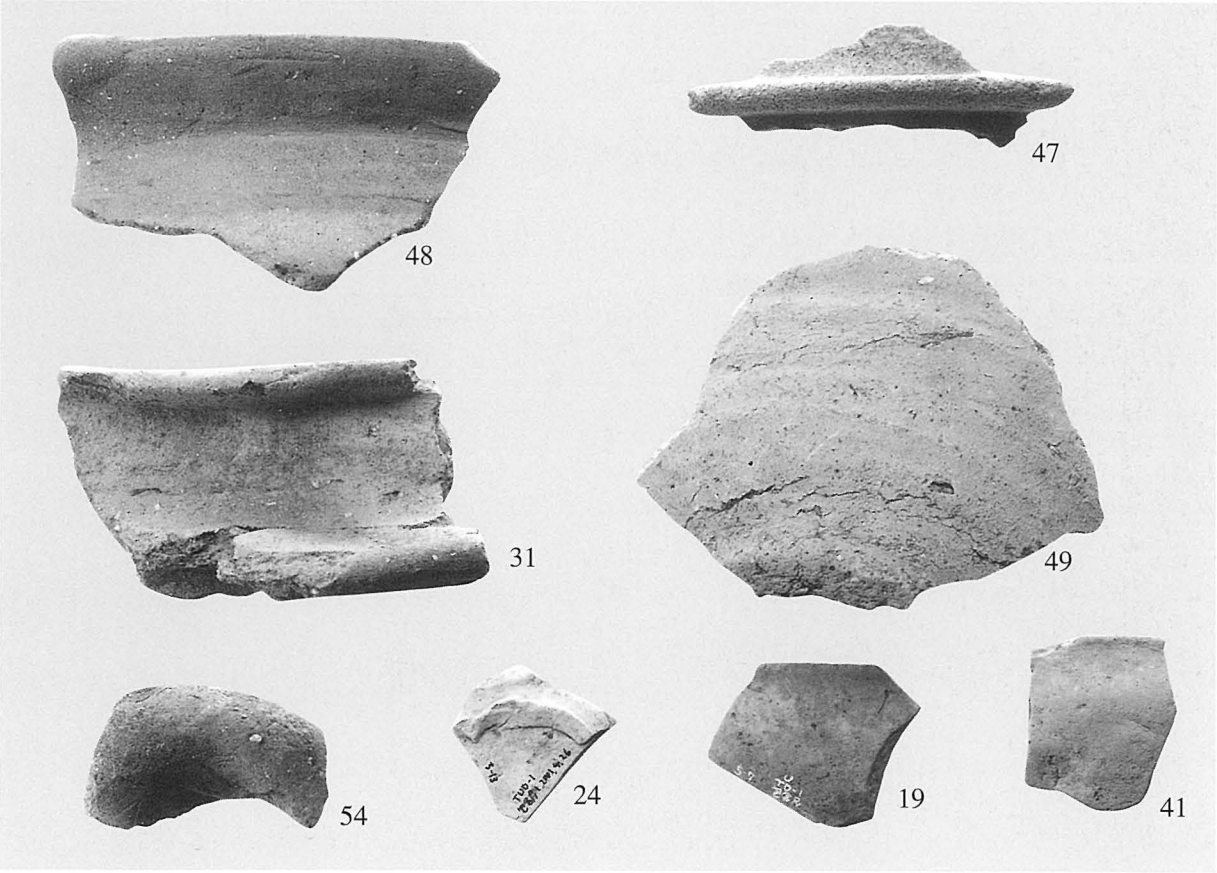
検出遺構全景（南より）




SP06検出状況（西より）

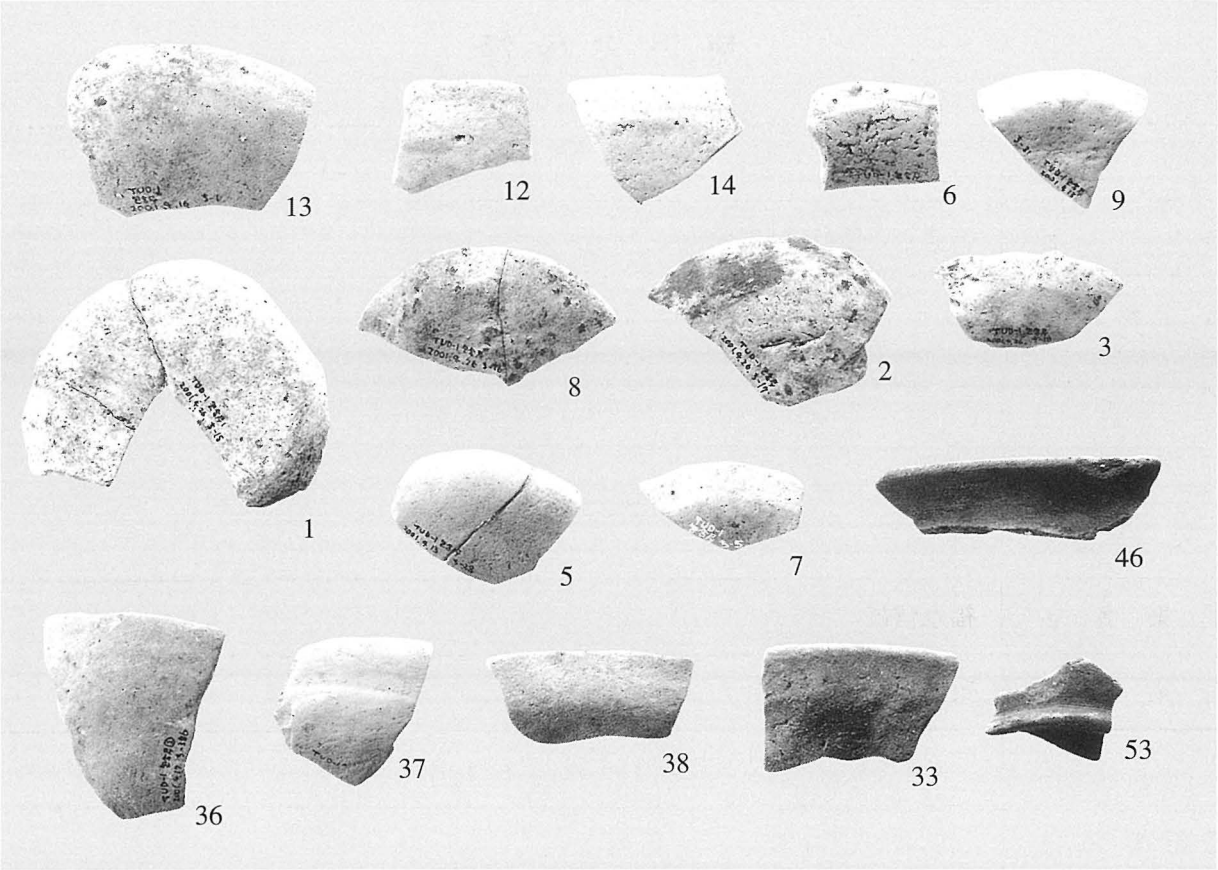



須恵器・国産陶器・中国製磁器（白磁）

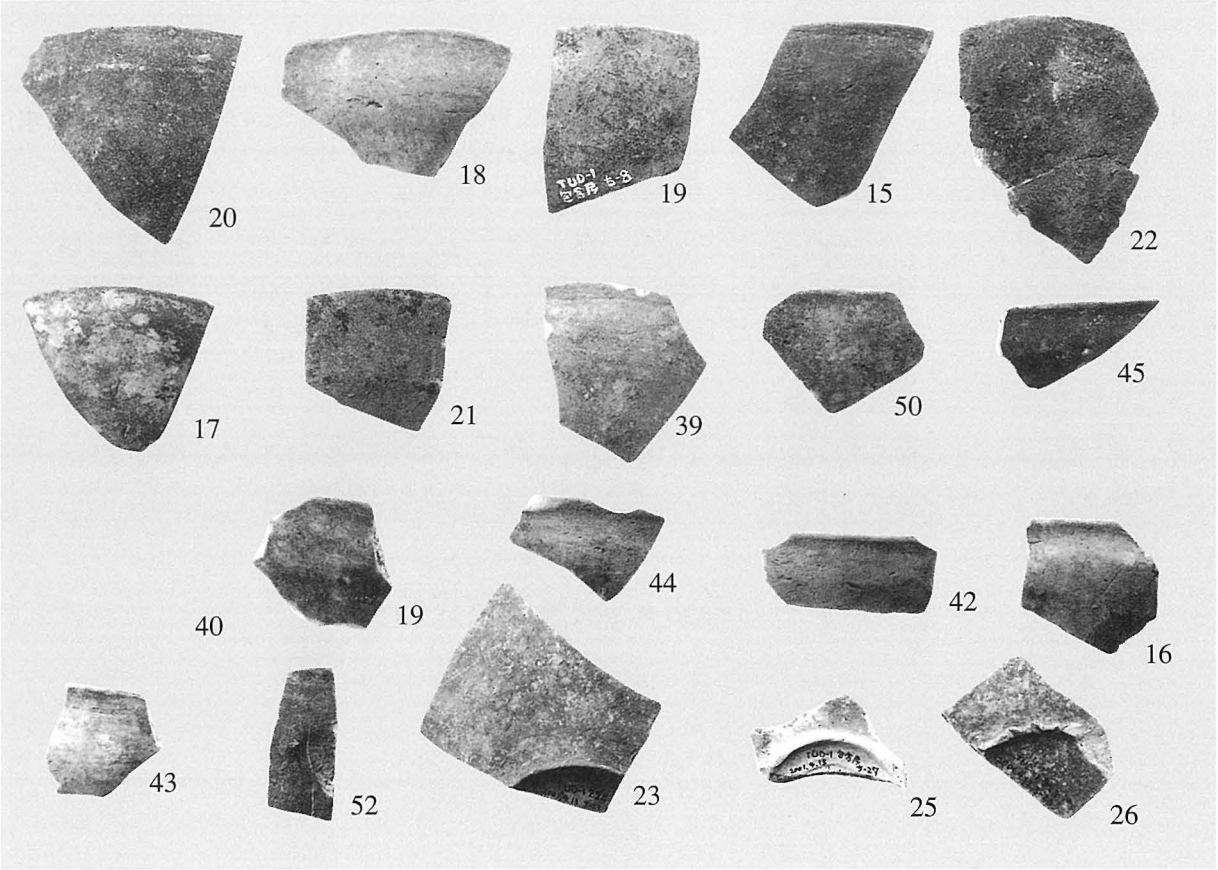



土師器・瓦器・東播系須恵器

図版4　出土遺物




土師器皿・甕・鉢




瓦器椀

# 報告書抄録

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| ふりがな | とようらだにこふんぐんだい　じはっくつちょうさほうこく | | | | |
| 書名 | 豊浦谷古墳群第1次発掘調査報告 | | | | |
| 副著名 | | | | | |
| 巻次 | | | | | |
| シリーズ名 | | | | | |
| シリーズ番号 | | | | | |
| 編集者名 | 福永信雄 | | | | |
| 編集機関 | 東大阪市教育委員会 | | | | |
| 所在地 | 〒577-0843　東大阪市荒川3丁目4-23 | | | | |
| 発行年月日 | 2001年10月26日 | | | | |
| 所収遺跡 | 所在地 | 市町村コード | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 豊浦谷古墳群 | 東大阪市東豊浦町966番地 | 27227 | 平成13年4月13日～4月19日・4月24日～5月1日 | 32.4m² | 分譲住宅建設 |
| 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 古墳群・集落 | 鎌倉時代 | 柱穴・土壙 | 土師器・須恵器・瓦器・中国製磁器 | | |


豊浦谷古墳群第1次発掘調査報告

平成13年10月26日

発行 東大阪教育委員会
印刷 グラフィック・アーツ・大阪